

# 私の出会った人

(その11)

関谷啓子

37号と同じお元気なおばあちゃんとの話

ああ。来てくれたんか。まま、ここへお座り。(と言いつつ、ベッドの下に落ちたタオルを杖を使って上手に手元へ引き寄せる)

ここにいると職員さんは忙しそうにしてはるやろ。そやから自分でできることはなるべく工夫するようにしているの。うまいやろ。ボケたくないからなあ。工夫するんやで。

(と言ってドヤ顔が可愛らしい)

そうそう、あんたの夢を見たんや。そしたら来てくれて嬉しいなあ。

もう秋やな。田舎では柿がたくさんなるんやけど、みんな渋柿やから後の始末が大変なんや。あんた、知ってるか？夜なべ仕事に皮をむいて二階から吊るすんやで。

剥いても剥いても柿は減らんし手は痛くなるし大変や。それに私背が低いやろ。吊るすことができへんから剥き専門やった。町の人には吊るし柿を見て綺麗とか美味しいとか言うけど、私らにとって吊るし柿はしんどい仕事の一つやったなあ。町の人には気楽やなあ。

しんどい仕事やったけど、みんなで夜なべ仕事するのは楽しいこともあるわな。思い出すとやっぱり楽しかったなあ。今、子供はなんでも言うことを聞いてくれるけど、一緒に夜なべ仕事なんかしないしなあ。時代が変わってしまったんやなあ。解ってるんやけどなあ。(暫く沈黙)

横になってもかまへんかあ。そうやなあ。変わってしまったんやなあ。

(ベッドに横になり目を閉じて胸のあたりで両手を組まれたので、お礼を言って退室)

前回に続いて、生家での思い出を話された。話は実に生き生きとしっかりしており、家族揃っての夜なべ仕事の様子が目に浮かぶ。沢山の兄弟の中で、自

分の仕事を成し遂げた充実感が、楽しい思い出として心に刻まれているのは、聴く私にとっても嬉しいことだし、90歳を超えて反芻する思い出がこのように楽しい話であると言うことはAさんにとっても幸せなことだ。

戦争を挟んで辛い思いもあっただろうし、このように楽しいことばかりを話されるのは、Aさん自身努めてそうしておられるのだろう。ともすると足りない事だけを心に留めている自分を振り返って恥ずかしくなった。

「子供とは一緒に何かをすることもない」と話された言葉に胸を突かれた。時代が変わってしまったことは理解していても、その寂しさは消えない。なんでも言うことを聞いてくれる子供達には、それでも一番してほしいことは口には出されないのだ。

亡くなった両親は、本当は私に何をして欲しかったのだろうかと思った。

話の最後がなんだかしんみりしてしまい、言葉がうまく出なかったのが心残りであった。

「横になるわ」と言ってくださり面会は終わってしまったが、帰る途中で最後の「横になるわ」はAさんの心配りだった・・・と気がついた。

いつか会えたら・・・と思っていたのですが、足のギブスは暫く取れそうもなく、よもやま話は来年かなあ～。

ではでは。お身体をお大切に！